

健康文化

看護婦の自己開発について

河津 芳子

ここ十年ほどは、看護教師という立場よりも、患者として病院に出入りすることが多くなった。

初診の窓口にいる看護婦は、何やらペンを走らせ忙しそうな素振り。おそるおそる「あとう」と声をかけても手を休める様子がない。思い切って、

「胃が悪いようなので、消化器の先生に診ていただきたいのですが……」

と言うと、

「胃が悪いくらい、どの先生でも診ますよ。」と、初めて顔をあげ、射るような視線を投げかける。窓口のそばには消化器〇〇先生、循環器〇〇先生、……という看板が掲げられているのだけれど。

カナをふったのに、姓の読み方を間違えて、

「コーズさん、何度呼んでも居ないから」

と叱られながら、診察室に招き入れられる。

今日はこれだけの検査を受けて帰るようにと指示され、看護婦は、検査室に行く道順を教えているらしいのだが、呪文でも唱えているかのように、単調に口の中でモグモグと言っているのでよく聞き取れない。聞き返せばまた睨むような視線が投げかけられるに違いないと思い、表示板を頼りに検査室を訪ね当て、どうやら検査を済ませる。

病院を出ると怖ろしく疲れている自分に気づく。

これがあの人達の現実の姿なのだろうか？

病める人の助けになることを願い、献身的に尽くす姿勢に憧れ、優しい看護婦になることを夢見て入学し、すし詰めのカリキュラムにもめげずに努力して、卒業証書を手に巣立っていった人達。にこやかな笑顔で患者を迎え、家族を思うような気持ちで優しく看病したいと言っていた彼女達の気持ちに嘘はないはずだ。

実際、その通りの日常を過ごし、看護婦になってよかったと実感し、

「子どもの寝顔を見ながら出勤するのは辛い時もあるけど、やっぱり喜びも大

きいんです。」

と、生き生きと報告してくれる卒業生がいる。そんな彼女たちの話を聞いていると、私まで生き生きした活力を分けてもらっているような感じで、元気が出て嬉しい気分になる。

けれども、私も一緒に滅入ってしまいそうなことを聞くこともある。

「息子に、お母さんは看護婦さんだったんだよねって言われると、イヤな気分になるんです。看護婦になりたくてなったわけじゃない。父親が急死して経済的に無理だったので、仕方なく准看護婦になったんです。これで終わっちゃいけないと思って、進学コースに進みました。進学コース出身と言われるのがいやだから、頑張って助産婦の免許も取りました。」

というAさんは看護教師だ。

「OLもやってみたのよ。でもね、OLってのは、自分で責任持つようなこと何にもなくて、言われて何かするだけって感じ。給料も少ないしね。そこいくと看護婦は給料いいじゃん。同じ年でこれだけ給料もらえるのってそうそうないから。やっぱり、看護婦してるってわけ。」

というBさん。

二人とも看護職に魅力を感じられないと言いながら、看護職から離れられないでいる。Bさんが口にしたように、それには経済的な側面もあるかもしれない。しかし、魅力を感じられないと言っている彼女たちを惹きつけている何かがあるのだ。それをつかめなくて、彼女達自身もどかしい思いをしているのではないだろうか。トラバーユしながらもどってきたものの、どんな魅力があるのかを上手に表現できないために、同僚達に、OLより給料がいいからという言い訳をしているのかもしれない。看護職の中にその何かを見つけることが出来たら、彼女たちも生き生きとして甦り、

「息子にお母さん、看護婦さんだったんだよねって言われても、気にならなくなりました。そうだよ。こんな患者さんに出会った、こんな人もいてねって、自分が経験したいろんな事を話してやれるようになりました。」

とか、

「あっちこっち目移りしたけど、看護の仕事ってやっぱりいいところあるよ。患者さんが元気になって、ありがとうって言ってくれるとさ、心からよかったなって思えるし。」

と言えるようになるに違いないと思うのである。

患者と心を通わせるところに看護の真髄があるし、人間同士の心の通い合い

がなければ癒すという現象は起きない。看護職に生き甲斐を感じている看護婦達は多くの患者達との出会いを喜びにしている。しかしながら、それが出来ない看護婦もいる。もちろん向き不向きがあるから誰もが看護職に向くように教育するという事はできない。しかし、すべてを個人の性格に帰してしまわずに、何かヒントを与えられないだろうかというのが長い間看護教育に携わってきて感じる私の思いだった。そして、そういう思いを抱きながら学生・教え子たちを見ていると、患者の方を向けない人や看護に夢を失ってバーンアウトしてしまう人の多くは、自分自身で作った檻の中に自分を閉じこめたり、鎖で自分をがんじがらめにしているようだ。檻や鎖は「べきである」というとらわれである。そういう私自身、看護学生として学ぶ間にたくさんの「べきこと」を身につけていたので、看護婦として臨床で働き始めた時はきっと肩に力が入っていたに違いない。教壇に立つようになった時も同じだった。自分といくらか年齢の違わない人たちを前にして教師らしく振る舞うには「べきである」ことがたくさんあって、ある日とうとう音をあげてしまった。ところが、これが功を奏して、以後肩の力が抜け、今まで学生という一固まりの集団として映っていた一人一人の学生の姿が見えるようになったのだ。自ずと学生との意志疎通も進むようになり、教育という仕事に熱心に取り組めるようになった。

そういう自分の体験からしても、学生たちにも看護婦たちにも、束縛から自分で自分を解放してやる機会が欲しいと思う。そういう気持ちで取り組んできた自己開発に対する取り組みが看護婦の世界ばかりでなく、教師や一般社会人にも迎えられていることは、人間の生き方として大事なことなのだろうと感じている。

ともあれ、教師として生き生きとした看護婦に育って欲しいと願ってきたことは、患者になったときの私の願いでもある。

(名古屋大学医療技術短期大学部助教授・看護学科)